＜たねの会＞

2003年　任意団体「さいたま冒険遊び・たねの会」発足

2006年「さいたま冒険遊び場・たねの会」に改名

2007年「別所沼プレーパーク」定期開催スタート（自主開催）

2010年「別所沼プレーパーク」がさいたま市の委託事業となる。

（2016年より「あそびの森」に運営を委譲）

2016年「特定非営利活動法人　たねの会」設立

2018年　さいたま市の業務委託を受け

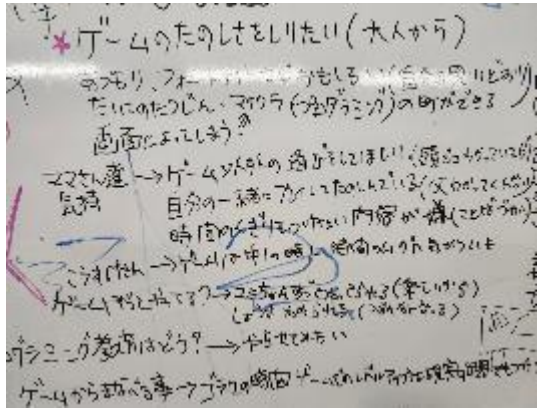
「冒険はらっぱプレイパーク」運営開始

2022年　「移動型プレーパークでのびのび遊べるまちをつくろう！」

2023年　「フリースクールくるーず」開設

発表者　特定非営利活動法人たねの会
事業名　誰ひとり取り残されない学びの保障にむけた地域づくり事業

1

2


3

4

5

6

【成果】

1．室内プレーパーク＆おしゃべり会（3回・参加者：子ども16名・大人18名）
遊びのスタッフ（プレイワーカー）と話を聴くスタッフ（フリースクールスタッフ）を配置することによって、子ども・大人それぞれが気持ちを開放する時間をつくることができた。

2．こどもの会＆親の会（3回・参加者：子ども19名・大人14名）
現在「不登校」で悩む親御さんの気持ちを参加者同士で聴き合い、共有する時間をもつことができた。2回目では、こどもと大人が一緒に、主に「ゲームをして過ごすことの是非」について互いの考えや気持ちを聴きあうことで、こどもの視点に立ってみるという大人の視点が醸成されたのではないか。

3．「まちの達人とあそぼう！」（4回・参加者：子ども39名・大人29名）
プラントカバー作り、木工遊び、だるまの絵付け、アプリづくりなど、多種多様な達人をお招きし、子どもたちと触れ合っていただく時間をつくることができた。楽しい作業、遊びを通して、学校に行っている行っていない関係なく、一緒に学べる時間、関係を築くことのできる機会をつくることができた。

4．映画「ゆめパのじかん」上映会（参加：子ども12名・大人26名）
こどもが夢中になって遊ぶ時間や自分で決めて過ごす時間の中で、それぞれの学びを獲得している子どもたちの様子をドキュメンタリーで感じていただくことができた。また、そこに関わる大人の立ち位置、視線、距離感について、上映後、参加者で語り合うことができた。

5．「こども支援に関する学習会」（3回・リアルタイム35名・アーカイブ111名）
「韓国と台湾の教育制度から考える不登校とは？」「多様な学びを保障するために必要なこと」「子どもの学ぶ権利と多様な学びのこれから～こども基本法の施行をふまえ」の3回を実施し、多くの方と現在の日本の教育制度の課題や、これからの私たちにできることについて考える時間をもつことができた。

6．ストリートイベントへの参加（参加：子ども8名・大人6名）
リノベーションスクール@岩槻において誕生した「部活商店」のCCC（まちのごみ拾いをした後、コーヒーなどを飲んでおしゃべりをする）と「ボードゲーム部」への参加を呼びかけ、実施。ひとり（一家族）だけでは参加しづらいまちのイベントにみんなで参加し楽しむことができた。まちを知り、まちの人との関りも生まれ、自分たちの過ごすまちへの参画意識も育むことができたのではないか。

発表者　特定非営利活動法人たねの会
事業名　誰ひとり取り残されない学びの保障にむけた地域づくり事業

【課題と展望】

「おしゃべりの会」や「親の会」に関しては、予想していたよりも少ない人数での開催となった。来てくださった方のお話を聴くと、我が子が学校に行きたくない、行けないとなった瞬間から、様々な葛藤を繰り返し、先の見えないトンネルの中で苦しんでいるような状態に陥っている場合も多く、その苦しさを理解してもらえないことがまた孤立感を生んでいる。

また、おしゃべりの中では、相談した先やがんばって何かをしてみようとした先で、理解のない言葉がけをされたり、地域の中で異質な目で見られることで子どもも親も傷つき、出かけてみよう、何かやってみよう、という意欲自体がそがれてしまった、という声もあった。そのようになると心理的にも地域の中でも親子が孤立してしまい、家庭の中だけで問題を抱え込んでしまうということになってしまう。さらに、家庭内において、登校に関する価値観の違い（親子間、夫婦間、祖父母世代と親等）から、親や子どもがますます追い詰められてしまうということも少なからず起こっている。

そのような中、こういうった集まりに顔を出し、自らのことを話すということ自体、エネルギーのいることであり、そのような方も来やすい設定、話しやすい場づくり、関係づくりが大変重要であるということが認識できた。また、追い込まれる前に、親同士や当事者、経験者、専門職員などと気軽に話ができる環境をつくっておく必要もある。

そして何より、不登校に対する偏見や「学校は行かなければいけない」という周囲のまなざしを変え、ひとりひとりの子どもたちにふさわしい場づくりや、その場を選択できることが当たり前の社会になっていくことが必要であると考える。

本来「学校に行く」ということと、人が「その人らしく生きる」ということのどちらがこの世界の最上位目標なのだろうか。上映会や学習会でもあったように、本来ひとりひとりには自ら育ちたい、世界を知りたい、という欲求があり、まちの達人と遊ぼうやストリートイベントへの参加では、子どもたちはのびのびと自分を表現し、自ら学びを得ている姿があった。時代や国の要請により、必要と思われる教育が用意されることは大事であると思うが、その人の意思により、自分にあった学びの場を選択できることが、制度的にも私たちの暮らしの中にももっと当たり前になっていかなければならない。

「誰ひとり取り残されない学びの保障にむけた地域づくり」に向けて、本事業を通し、様々な実践を試みることができ、私たち自身が大きな学びを得ることができた。今後も、地域の人とつながりながら、自分たちにできる実践を続けていきたい。

【今後の活動】

1．「こどもの会（遊びの会）＆親の会（おしゃべり会）」の継続
月に1回程度、こどもは遊び、親は親同士話せる場づくりを継続する。
本事業でつながりの持てた親にも参加してもらうことで、始めてきた親にとっても安心して気持ちを話せる場づくりができるのではないか。

2．「まちの達人とあそぼう！」の継続
イベント的に継続して開催したことで、「何か自分にもできることがあれば」と言ってくださる方も増えてきた。地域の中で見えてきた方々にもご協力いただきながら、子どもたちと地域の方がつながれる場を継続していく。

3．学習会の継続・発展
今回、「韓国と台湾の教育制度から考える不登校とは？」「多様な学びを保障するために必要なこと」「子どもの学ぶ権利と多様な学びのこれから～こども基本法の施行をふまえ」の3回を実施し、日本における教育制度の課題や現状についての認識を深めることができた。今後はより、自分たちの身近な暮らしの中で何ができるかを考え、実践していくためのつながりづくり、学習の場をもうけていく。

4．ストリートイベントへの参加・開催
家庭だけではできないこととして、こうしたまちでの活動があげられる。イベントへの参加のみならず、今回できたつながりを元に、自分たちでイベントを企画、実施させてもらうなど、より子ども主体で活動できる場、生きた学びの場をつくっていきたい。また、地域の方に、こうした子どもたちの姿をみてもらうことで、「不登校」の子どもたちへの偏見をゆるめ、どんな子どもものびのびと遊び育つことのできるまちの空気を醸成していきたい。

5．声を集め、行政へ届ける
今回の学習会で学んだように、子どもが自分の学びの場を選べるようになるためには、学校以外の場へ通う場合の経済的支援も必要である。また、親や子どもが現在何に苦しんでいるのかということを、今後の行政施策にも活かしていただけるよう、声を届けたり発信を強めていきたい。